

「見立て」から考える日本語と日本文化の相同性—比喻との相違を視野に入れて—

本ワークショップは、古来より日本文化の様々な分野で行われてきた「見立て」と呼ばれる手法に注目し、それらの基礎に言語使用に先立つ話し手の認知的営みとしての〈主観的把握〉という、事態を臨場的・体験的に、かつ主客合一的に捉える行為が見られることを確認した上で、日本語と日本文化の諸相を統一的に捉えるものである。すなわち「見立て」を介して日本語と日本文化の相同性 (homology) を捉える、文化記号論的な試みである。「見立て」は伝統的な文芸・美術・芸能・作庭などから、商業デザインや広告・建築など様々な創造の場で行われており、先行研究も膨大に見られ、いまや「見立て」を抜きに日本文化を語ることは難しい。例えば、茶道の民器を茶道具に見立て、芸術作品へと高める捉え方や、華道の天地人を見立てた活け方、和菓子や料理の命名やその風趣、四神の方角に見立てて造られた平城京、全国に見られる「～富士」という命名など枚挙にいとまがない。文芸でも、例えば芥川龍之介の「落葉焚いて葉守りの神を見し夜かな」は、主観的に捉えた視覚印象である「見え」に即した見立ての句である。和歌の世界では万葉集の時代から連歌という文芸があり、これは前句を発想や連想の場とし、新しい句境を「見立て」によって紡いでゆくもので、続ける各人の個性に依ってどのようにでも千変万化するところに面白さがある。すなわち連歌は、前句で指定された場を契機に認知システムによって接続する前句と関連しつつ、或いは全く乖離して次句が創出され、相手の表現秩序や表象世界に己の表現世界を融合させながら、連続的に展開するものであり、いわば抽象的思考を言語化以前の状態でモノや場として「見立て」、提示することを連続的に行うことで成立するものである。近代文学でも「見立て」の例として梶井基次郎の「檸檬」が挙げられるが、これは一顆のレモンを丸善を吹き飛ばす爆弾に見立てるところに表現の主眼がある。「見立て」をめぐる問題の一つは、こうした文化・文芸の研究が個々の分野に留まり、「見立て」を介して互いに共通することが指摘されてこなかった点であり、次の問題はこれと関連し、「見立て」を介した言語と文化との相同性の研究がほとんどなされていないと言う点であるが、この点日本語の分野でも文学的修辞法だけでなく、命名や文法・語法において一つの事態を何かに見立てて主体的に言語化する手法が観察される。例えば中古の「こぼれかかる」という複合動詞には「髪」を主語とする用法がある。「こぼる」という動詞はそもそも「水があふれ出て落ちる」という意味が原義であると考えられているが、このような「こぼれかかる」の用法は「黒髪」の「あふれ出て落ちる水」との見立てを背景として存在していると考えられる。現代語では「髪が肩にかかる」「前髪が目にかかる」などの用法はあるが、「髪」「こぼれる」が共に使用されることはない。そこには中古における現代とは異なる見立ての存在が窺える。また「見しむ」という複合動詞は、視覚で知覚した像をあたかも気体か液体のように見立て、それが心にしみるという捉え方を言語化したものである。このような「見る」と「しみる」の結び付きも、中古における特異な見立てがなさしめたものであろう。現代語でも「言いよどむ」のように、言いだしかねる様子を水の淀みに見立てる用法が見られ、言語と文化の諸相との間に「見立て」をめぐる相同性が確認される。次に、「見立て」は比喻との相違が分明でないという問題があるが、「見立て」は話者がイマ・

ココの事態を主観的に把握し、その「見え」から連想・誘発された仮想の「見え」を重ね合わせて、別種のモノ・コトを生み出す創造的手法だと捉えられる点で、モノの概念や性状の表現的な規定を志向する比喩とは相違が見られる。文化や文芸の分野で比喩が取り上げられることが少ないのは、このためだと言えよう。以上からもわかるように、「見立て」は創造の場におけるイメージ・スキーマとしての役割を果たすが、同時に見る者が主体的かつ自身の体験や身体性ととともに自由に解釈・鑑賞する際にも用いられ、この点で日本語話者の読みに見られる読み手—受け手—責任性に通じる。日本の文芸や芸能は、「～道・流派」などの名のもとで造り手と受け手を育て、継承するシステムを構築し、創造と鑑賞の連鎖をも生み出してきたが、人の認知の中心たる視覚イメージに立脚した「見立て」は、その有効な動因となっていると推測される。

「主要参考文献」

芦津丈夫・木村敏・大橋良介 1996『文化における〈自然〉』人文書院

池上嘉彦 1975『意味論—意味構造の分析と記述』大修館書店

池上嘉彦 1981『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジー』大修館書店

池上嘉彦 1983『文化記号論への招待』有斐閣

IKEGAMI, Yoshihiko 1996 Some Traditional Japanese Visual Tropes and their Perceptual and Experiential Bases. *Poetica* 46

池上嘉彦 2002『自然と文化の記号論』放送大学教育振興会

池上嘉彦 2006『英語の感覚・日本語の感覚—〈ことばの意味〉のしくみ』日本放送出版会

池上嘉彦 2006 「〈主観的把握〉とは何か—日本語話者における〈好まれる言い回し〉」『言語』35-5

磯崎新 1983『庭園と離宮 雪月花と遊ぶ』講談社

磯崎新 1990『見立ての手法』鹿島出版会

磯崎新・福田和也 2004『空間の行間』筑摩書房

伊地知鐵男 1996『連歌・連歌史』汲古書院

片桐洋一 1986「「見立て」とその時代—古今集表現史の一章として—」『論集 和歌とレトリック 和歌文学の世界 第十集』笠間書院

茅野修 1996『「見立て」の政治学』東洋経済新報社

熊谷高幸 2011『日本語は映像的である 心理学から見えてくる日本語のしくみ』新曜社

郡司正勝 1987『風流の図像詩』三省堂

国文学研究資料館 2008『図説「見立て」と「やつし」』八木書店

小町谷照彦 1994『古今和歌集と歌ことば表現』岩波書店

小松左京・高階秀爾 1976『絵の言葉』講談社学術文庫

清水泰博 2009『京都の空間意匠』光文社新書

朱捷 1991『神さまと日本人のあいだ 「見立て」にみる民族の感覚』福武書店

高階秀爾・芳賀徹 1976『芸術の精神史 蕪村から藤島武二まで』淡交社

高階秀爾 1986『日本近代の美意識』青土社

高階秀爾 1996『日本美術を見る眼』岩波書店

田中優子他 1994『現代見立て百景展』INAX BOULLET

日本の美学編集委員会 1996『日本の美学』第24号 特集「見立て」ペリカン社
東明雅 1978『連句入門』中公新書
藤平春男 1983「新古今とその前後 著作集第二巻」笠間書院
藤平春男 1986「心と詞—その歌論史的序説—」『論集 和歌とレトリック和歌文学の世界
第十集』笠間書院
松岡正剛 2006『日本という方法 おもかげ・うつろいの文化』日本放送出版協会
宮下啓三 1997『日本アルプス 見立ての文化史』みすず書房
村上直之 2012「見立て考」『小原流挿花』2月号 特集『見立て』735
山梨正明 2009『認知構文論 文法のゲシュタルト性』大修館書店